

『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ —gelbüre kö'ün=「語り手」の仮説をもとに—

藤井 真湖

本論は『元朝秘史』（四部叢刊本）の文学的テキスト研究である。『元朝秘史』（以下、秘史）の§81にはタイチウド族がテムジン（チンギス・ハーンの幼名）を誘拐したときに、“怖がりの若者”（gelbüre kö'ün）と表現されている人物がテムジンを逃してしまうという事件が語られている。この人物が登場するのは、秘史においてこの節のみであり、その名前さえ叙述されないまま終わっている。それゆえ、この人物は取るに値しない人物のように見える。しかし、本誌第7号でも論じたように、秘史の「語り手」がもともとタイチウド族に属していた人間であり、ジャムカ陣営からチンギス陣営に移行した人物であることを考慮に入れるならば、チンギスを逃がしてしまう「失態」を犯した行為は、チンギス陣営投降後には逆に「功績」に逆転することになる。このことから、この gelbüre kö'ün を「語り手」と同一人物、あるいは語り手が好意を寄せていたタイチウド族内の人物と考える余地が浮上してくる。この仮説を前提にすると、秘史におけるソルカン・シラやジェベといった人物も新たな視点からとらえられることになる。

1. gelbüre kö'ün 論から展開するソルカン・シラ論とジェベ論

1. 1. 本論の前提と本論の目的

本論の目的を述べる前に、これまでの筆者の秘史に関する一連の考察における要点を述べておきたい。ただし、議論が必要以上に煩瑣になることを回避するため、本論を展開するにあたって必要不可欠のものに限ることとする。

秘史には「語り手」の存在をうかがわせる“我々の兵士たち”というような“我々”表現が時に現れる。筆者は、この「語り手」がもともとタイチウド族集団に従属していたが、§119の時点でククチュという子供を連れてチンギス陣営に投降したこと¹⁾、そして、この「語り手」がバアリン族のナヤアという人物と同一人物なのではないかという仮説を展開した²⁾。この考察に基づいていえることは、「語り手」=ナヤアは、メネン・バアリン族のホルチ・ウスンとの対比においてチンギスの信任をホルチ・ウスンよりも受けたことを秘史に織り込もうと意図したのではないかということである。

「語り手」=ナヤアが自己を、ホルチ・ウスンと対比させ、彼よりも優位に置こうとする意図は、チンギスのカハン推戴の経緯を考察する上で重要な意味をもっている。なぜなら、秘史ではチンギスがカハンに推戴することを促したのは明示的にはホルチ・ウスンと叙述されているからである。ここには、ナヤアの自画自賛的趣向が観察される³⁾。ナヤアは、明示的にも、タイチウド族がチンギスに全滅させられてからチンギス陣営に降ったと叙述がされている（§149）。ここにもナヤアの自画自賛的趣向が観察される。ただし、この明示的叙述が真実ではないらしいことについては既に指摘したとおりである⁴⁾。

以上のように、明示的であれ、非明示的であれ、「語り手」＝ナヤアの自画自賛的趣向が秘史の考察のなかで立ち現われてきたといえる。ナヤアのこうした自画自賛的趣向の強さを考えると、§ 119における「語り手」＝ナヤアの真実に近いと想像される投降は隠されなければならなかったことは首肯できよう。しかし、この真実に近いと想像される投降はそもそも、なぜ引き起こされたのであろうか。

本論では、この投降の理由を探るため、チンギスがタイチウド族に拉致された § 81 に現れる“怖がりの若者” (gelbüre kö'ün) という表現に注目することにした⁵⁾。なぜなら、本誌第7号でも論じたように、秘史の「語り手」がもともとタイチウド族の人間であり、ジャムカ陣営からチンギス陣営に移行した人物であることを考慮に入れれば、チンギスを逃がしてしまう「失態」を犯した行為は、チンギス陣営投降後には逆に「功績」に転化することになるからである。このことは、gelbüre kö'ünを「語り手」と同一人物と考えるか、あるいは「語り手」が好意を寄せていた人物だと考える余地を浮上させている。

1. 2. 議論の流れ

1. 1. で述べた推論に基づいて、まず § 81 を取り上げ、タイチウド族によるテムジン誘拐の顛末を追うことにしたい。次に、この叙述をよく観察すると、テムジンを逃してしまった“怖がりの若者” (gelbüre kö'ün) とは逆に、テムジンを助けることになったソルカン・シラという人物が当然ながら注目すべき人物として浮上してくる。「語り手」＝ナヤアが同じバアリン族のコルチ・ウスンという人物と自らを対比させていることを考えると、“怖がりの若者”がソルカン・シラに対比されている可能性は高いものと推測される。そこで、秘史におけるソルカン・シラという名前に触れられる叙述箇所において、ソルカン・シラがどのように描かれているかを観察する。

ソルカン・シラについてのこの考察の中では、ジェベという同じくタイチウド族に属していた人物がソルカン・シラと対比されて叙述されていることが判明する。そこで、秘史におけるジェベという名前に触れられる叙述箇所を、ソルカン・シラの場合と同様に、ジェベがどのように叙述されているかを観察する。

なお、本論では取りこぼしがないように、四部叢刊本を基にした栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』(東北アジア研究センター叢書第33号 東北大学東北アジア研究センター 2009年)を参考に事例を抽出し、さらに当該箇所については、栗林栗林均・确精扎布(編)の『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』, 東北アジア研究センター叢書第4号, 2001年(東北大学東北アジア研究センター)で確認した。本論における邦訳に関しては、主に1984年から1989年にかけて刊行された小沢重男『元朝秘史全訳』全3巻及び『元朝秘史全訳続攷』全3巻(風間書房)を参照にしたが、これら以外にも小沢重男『元朝秘史(上)(下)』(岩波文庫)も参考にした。邦訳の引用の場合、文語的表現などを若干現代語に訳しなおした箇所があるが、文意は踏襲したつもりである。

最後に、本論の考察をまとめ、今後の課題を述べることにしたい。

1. 3. 本論における方法論

1. 1. で示した目的を遂行するにあたり、本論が採っている方法論を確認しておきたい。秘史研究において筆者の一貫して取ってきた立場は、既に本誌第7号においても表明しておいたものであるが、重要なので、改めて以下に引用しておきたい⁶⁾。

第1に、本考察においては、歴史的に実在した人物としてのチンギス・カン研究或いはモンゴルの歴史研究を参照にしない。その理由は、秘史の文学的テキスト研究として、まずは秘史テキストそのものに着目する必要があると考えるためである。史実としてのチンギスやモンゴルの歴史は、言語外事実を無視したテキスト言語内研究をおこなった後に照合したいと考えている。

第2に、本論のテキスト解釈であるが、この解釈の方法論は、フランスの構造分析・記号論者であるロラン・バルト Roland Barthes の『物語の構造分析』における行為項分析と機能体分析のどちらか、あるいは両者を組み合わせたものとなっている⁷⁾。この詳細な分析の紹介と実際の応用については拙著の関連箇所を参照にされたい⁸⁾。

第3に、考察における解釈において、当該箇所の事例の分析で解釈しえない場合、それ以前の解釈を踏襲するという仮定的推論法 (abduction) を用いることにしたい⁹⁾。

2. “gelbüre kö'ün 論—「語り手」とチンギスとの対面が記された § 81—

すでに考察したように、「語り手」はチンギス陣営にいち早く降ったことがうかがわれる¹⁰⁾。この行動は肯定的にも否定的にも評価されうる。肯定的な評価としては、「語り手」はチンギスの能力をいち早く見抜いたということである。否定的な評価としては、「語り手」は自分の属していたタイチウドの主君であるタルクタイ・キリルトグをいち早く裏切ったということである。この行動は両面価値的な性格をのがれることができない。

「語り手」のチンギス陣営への移行に対する評価はどうあれ、そもそも「語り手」はなぜチンギス陣営に移行したのかという理由を考えてみると、巻2の§81は注目に値するようになる。なぜなら、これまでの一連の考察において、「語り手」はもともとタイチウド族に属していた人物であり、そしてこの人物がバアリン族のナヤアと同一人物であることを考えると、§81で登場する“怖がりの若者” (gelbüre kö'ün) も「語り手」=ナヤアであることを暗示しているように思われるからである。§81の内容は§79と§80における内容と連動している。すなわち、テムジン (チンギスの幼名) が異母兄弟のベクテルを同母兄弟のカサルとともに殺害したあと、タイチウド族のタルクタイ・キリルトグがテムジンを捕縛する内容となっている。この背景には、タイチウド族がテムジンのベクテル殺害に危機感をもったことがうかがわれる¹¹⁾。

§81の全文は次のようになっている。

§81：テムジンをタルクタイ・キリルトグが連れて行き、己が民人のところで掟をつくり、家々に一晩ずつ泊らせたとき、夏の初めの月の十六日、赤くて丸い太陽が輝く日に、タイチウド族はオナン河の岸辺で宴をひらき、日が落ちたところで散会した。テムジン、その宴のときに怖がりの若者が連れていた。宴の人々を散会させてから、その怖がりの若者から枷を引いて、彼の頭をひとた

びなぐりつけて、走ってオナン河の森のなかに身をひそめ、「見られるぞ」と思って、水の早瀬に仰向けに臥し、己が枷を水のままに流し、顔面だけを出して横たわった¹²⁾。

§ 81 でテムジンを逃してしまうという失態を犯した“怖がりの若者”の名前は秘史においては全く記されていない。この人物は、次の§ 82 にも登場しているが、ここでも名前には触れられておらず、“その失った人”(tere alda=qsan gü'ün)と表現されている¹³⁾。§ 82 の前半は次のようになっている。

§ 82 : その失った人は、大声で「捕えていた人を失ってしまった」と叫んだところ、散会したタイチウド族の者が集まってきて、日中のような月明りの中でオナン河の森を探した¹⁴⁾。

ここで、“怖がりの若者”がチンギスを取り逃がしたことは、チンギスに利することになっていることを考えると、この「失態」は、もしこの人物がチンギス陣営の者であったなら逆に「功績」になった行為となっていることに注目したい。なぜなら、まさにこのことは、チンギスを取り逃がしてしまった人物を「語り手」と同一人物ではないか、あるいは「語り手」が好意を寄せていた人物だとみなす余地があるからである。テムジンを取り逃がしてしまった人物が「語り手」その人であれ、「語り手」が好意を寄せる人物であれ、その人物はチンギスを逃がしてしまったかどで、タイチウド族傘下において、どの程度かはわからないものの、面目を失ったことが想像される。

この人物の特定は、すぐには難しいものの、「語り手」が好意を寄せた人物だというよりも、「語り手」その人の可能性の方が高いのではないかと考える。この場合、チンギスを取り逃がした人物がタイチウド族のなかで面目を失ったこと、そしてそのことはチンギス陣営に降ることによって意味を逆転させることができることを指摘しておきたい。すなわち、「失態」と「功績」は一つの現象の表裏であるとはいえ、「語り手」がタイチウ陣営側とチンギス陣営側のどちらに属するかによって真逆の評価が下されることを重視したい。なぜなら、こうした評価を心配していたことが、「語り手」の真実に近い投降が隠された背景だと考えられるからである。それゆえ、チンギスを取り逃がした人物を、「語り手」の好意を寄せていた人物というよりも、「語り手」本人とするほうが妥当のように思われるのである。実は、この推論が妥当である傍証は、別の箇所では与えられることになるので、この推論を前提として以下議論を進めることにしたい。

「語り手」がチンギスを逃がしてしまう“怖がりの若者”と同一人物であるとする、チンギスを助けたソルカン・シラの叙述が秘史でどのようになっているかが気になる。なぜなら、怖がりの若者とは異なりソルカン・シラは、チンギスを取り逃がしてしまった“怖がりの若者”とは異なり、タイチウド族に追われるチンギスを助ける人物として登場しているからである。この点を考えると、当然、この人物に関する叙述は微妙なものになっている可能性が高い。それゆえ、次節では、ソルカン・シラという名前に言及される叙述箇所を観察することにしたい。

3. ソルカン・シラ—秘史におけるソルカン・シラについての叙述の検討—

3. 1. 息子たちに比べられて色褪せる、チンギスを救ったソルカン・シラの「功績」

前節でも述べたように、“怖がりの若者”である「語り手」がチンギスを逃してしまう失態を犯しているのに対して、§ 82 においてソルカン・シラはチンギスを助けている。しかし、その叙述をよく観察すると、ソルカン・シラの叙述はチンギスを積極的に助けたというよりも、消極的に助けたニュアンスで叙述されていることに気付く。§ 82 において、ソルカン・シラは、チンギスの存在をタイチウド族の領袖タルクタイに言わないことを表明しているだけであって、チンギスを積極的にかくまおうとしたわけではない。

チンギスが頼ろうとしたのは、ソルカン・シラというよりもむしろ、ソルカン・シラのチンバイ、チラウンという2人の息子であった。このことは§ 84 において明確に叙述されている。チラウンのほうは§ 209 においてチンギスの四駿馬の1人として言及されている人物である。§ 84 は次のようになっている。短いので全文を引用しておく。

§ 84 彼らを散会させ終えて、[テムジン]は心の中で考え、「以前、家々をまわって泊っていた時に、ソルカン・シラの家泊れば、チンバイ、チラウンという二子が心を痛めて、夜に私をみて、私の枷を弛めてくれた。今また、ソルカン・シラは私をみて敵に告げずに立ち去った。今やまさに彼等こそ私を救うはずだ」と言ってソルカン・シラの家を探して、オナン河を下って行った¹⁵⁾

この§ 84 においては、ソルカン・シラへの恩義に触れられているが、続く§ 85 において、ソルカン・シラ宅へ着いたとき、ソルカン・シラはチンギスをかくまうことを拒絶しようとしているといえる。これとは対照的に、ソルカン・シラの息子たちは積極的にチンギスをかばおうとしている。彼らは、チンギスの処遇をめぐり、父であるソルカン・シラと対立しているのである。この§ 85 は次のようなものである。ここでも全文を引用しておく。

§ 85 : 家のしるしは、生乳を[皮袋に]注ぎ入れて、馬乳酒を夜を徹し日が明けるまで、たたき混ぜることだった。そのしるし[の音]を聞いていくと、たたき棒の音を聞いて辿りつき、その家に入ると、ソルカン・シラは『「自分の母、自分の弟たちを尋ね行け』と言わなかったが私は。なぜ来たお前は』と言った。チンバイ、チラウンという二人の彼の子供たちが言うのに、「幼き小鳥を、はい鷹が叢に追い込めば、叢はそれを救います。今、我等のもとに[テムジン]が来たのを、どうしてそのように言うのですか貴方は』と言って、自分の父の言葉を好まず、彼の枷を壊して火に燃やし、家の北側の羊毛の積まれた車に[テムジンを]のせて、カダアンという名の自分の妹に「生きている人に言うのではないぞ」と言って世話をさせた¹⁶⁾。

ここに登場するソルカン・シラの娘カダアンは後にチンギスの非正妻になっただけでなく、明示的に記されている (§ 146)。以前に考察したように、チンギスだけでなく、「語り手」もまたカダアンに好意的であったのであるが、「語り手」を含むチンギス陣営の者がカダアンの夫を殺害したことが、この好意の背景にあったと解しうる¹⁷⁾。

ここで重要なことと思われるのは、秘史の叙述を見ると、チンギスの命の恩人としてソルカ

ン・シラを叙述することはするが、ソルカン・シラの子供たちを対照させることで、ソルカン・シラを評価し過ぎないようにしていることである。微妙に否定的なこうしたソルカン・シラの叙述のされ方は、「語り手」と同一人物であると思われる“怖がりの若者”がチンギスを取り逃してしまう「失態」を犯していることと関係しているものと推測されるのである。

3. 2. ジェベの投降に比べられて色褪せる、ソルカン・シラのチンギスへの投降

ソルカン・シラは、タイチウド族のタルクタイ・キリルトクに従属していたが、彼もまた最終的にはチンギスに投降している。ソルカン・シラのチンギスへの投降は、§ 146 の後半に次のように記されている。

§ 146: 翌日、ソルカン・シラ、ジェベの二人—タイチウド族のトドゲの隸民だった—彼ら二人も[チンギスのところに]来た。チンギス・カハンはソルカン・シラのことを言うのに、「首にかけてあった重い木を地に棄てさせたのは、襟にかけてあった枷木をはずさせたのは、お前たち父子たちのおかげであったぞ。お前たちは、なぜぐずぐずしていたのかお前たちは」と言った。ソルカン・シラの言うのに、「私は心の中で[お前を]信じ思っていた。[だから]なぜ急ごうか私は。『急いで先に来ていたら、タイチウド族の領袖たちが私の残った妻子、馬群、糧食を灰の如く吹き散らしていただろう彼らは』」と思って、急がず、いま自分のカハンと一緒にになり追いついて来たのです私たちは」と言った。[このように]話し終わると、[チンギスは]「正しい」と言った¹⁸⁾。

ここでは、ソルカン・シラ親子は別々ではなく一緒に扱われており、3. 1. のような叙述の仕方とは少し異なっている。しかし、よく見ると、この場面でチンギスに投降するのは彼らだけでなく、ジェベという勇者もいることが注目される。なぜなら、ソルカン・シラの発言だけを見れば、彼は分別ある大人の発言をしているように見えるが、ソルカン・シラと共にチンギス陣営に降るジェベの§ 147 の発言は、ソルカン・シラの分別を吹き飛ばす、武人としての潔さを感じられるからである。§ 147 は次のようなものになっている。重要なので、少し長めであるが、全文を引用しておきたい。

§ 147: また、チンギス・カハンの言うには、「コイテンの地で対陣しあって、退きあい、立て直しあいしているときに、あの尾根の上から矢が来て、戦う口白の黄馬の、その頸背をグサリと誰が射ったのだ、山の上から」と言った。その言葉にジェベが言うには、「山の上から私が射ました。いまカハンから死をたまわうのなら、手のひらほどの地を汚し果てましょう。許しを賜るならば、カハンの前で深い水を横切り、光る石を砕き襲い行きましょう。「到れ」と言った地に青い石を砕き、「近づけ」と言った地に黒い石を砕き襲い行きましょう」と言った。チンギス・カハンの言うには、「敵として行動した人は、自分が殺したのを、自分が敵対しているのを、隠し、自分の言葉をはばかるものである。[それなのに]『こいつは』」と言うと、かえって自分が殺したのを、自分が敵対したのをはばからず逆に告げている。友であるべき人だ。ジルゴアダイという名をもっている。あの戦う、私の口白の黄馬を、その頸背を射たゆえ、『矢尖（ジェベ）』と名付けて先鋒としよう彼を」と言って、ジェベと名付けて、私のそばで行動せよ」と仰せになった。ジェベがタイチウドより来

て僚友となった経緯はこのようである¹⁹⁾。

以上をみれば、タイチウド族から同時期にチンギスのもとに投降してきたとはいえ、ジェベに対するチンギスの評価は、ソルカン・シラとは比べものにならないほど高いことが明らかである。§ 147 の冒頭のチンギスの問いは、ソルカン・シラと対比させるために、ジェベの答えを敢えて引き出させるために提示されたようにさえみえる。

以上の 2 つの事例は、「語り手」との対比で評価が高くなりそうなソルカン・シラの評価を抑制するために、前者ではソルカン・シラの子供たちが前面に出され、後者ではジェベが前面に出されているのだと考えられる。

興味深いことに、ナヤアのチンギス陣営への投降が明示的に語られるのは、この § 147 の 1 節後の § 149 においてである。言い換えれば、ソルカン・シラ、ジェベ、そしてナヤア (=「語り手」) 3 人の投降はほぼ連続的に述べられていることになる。ソルカン・シラ、ジェベ、ナヤア三者はタイチウド族に属していたので、明示的に連続して叙述されること自体は不思議ではないが、非明示的には、投降のスタイルとして明らかに異なるものとして叙述されていることが注目される。

この場合、ジェベは、ソルカン・シラとの対比では投降の仕方としては潔い投降かもしれないが、ナヤア (=「語り手」) との対比で言えばそうではないことが分かる。なぜならば、ジェベの投降よりもナヤアの投降が賞賛されるべきものとなっているからである。というのも、ソルカン・シラやジェベは「タイチウド族が全滅される前」に投降しているのに対して、ナヤアは「タイチウド族が全滅させられた後」に投降していることが観察されるからである。つまり、ナヤア (=「語り手」) は、タイチウド族が全滅した以降にチンギスに投降している点で、「究極に賞賛されるべき投降」になっていると言えるのである。タイチウド族の全滅について叙述されているのは、ソルカン・シラやジェベの投降が語られる § 147 と、ナヤアの投降が語られる § 149 のあいだに位置している § 148 においてである。ただしナヤア (=「語り手」) のこの § 149 の投降が実は虚偽である可能性が高いことについてはすでに考察したとおりである²⁰⁾。

いずれにせよ、ソルカン・シラやジェベとの対比においても、「語り手」=ナヤアの秘かなる自画自賛的な趣向が見られる。この事実はこの考察の出発点となった § 81 の“怖がりの若者”(gelbüre kö'ün) を「語り手」=ナヤアと同一人物と考える仮説の妥当性をあらためて示唆していると言えよう。以下においては、仮説に反することがないかどうか、以上で扱わなかったソルカン・シラやジェベについての秘史の他の叙述部分を考察することにしたい。

3. 3. ソルカン・シラについての他の叙述

秘史に基づくと、ソルカン・シラという名前は秘史において計 23 回現れる²¹⁾。その内訳は、Sorqan_šira が計 16 回、Sorqan_šira-da が計 1 回、Sorqan_šira-yi が計 1 回、Sorqan_šira-yin が計 5 回となっている。語尾別ではなく、出現の順番に表にすると、表 1 のようになる。表 1 のたとえば①の箇所 (02 : 18 : 08) という表記は、秘史の四部叢刊本の第 2 巻の第 18 丁目の 8 行目を意味している。①~⑨と⑬~⑯はすでに前節で取り上げたので、それら以外の事例

を以下に考察することにした。すなわち⑩～⑫および⑰～⑳が該当箇所となる。なお、考察する対象をわかりやすくするため、以下に考察する番号を表中において網掛けしておく。この網掛けの意味は表 2 の場合も同様である。

表 1：秘史におけるソルカン・シラの出現箇所

番号	表現形式	箇所（巻・§と四部叢刊本の巻：丁：行）
①	Sorqan_šira	巻 2 § 82(02:18:08)
②	Sorqan_šira	巻 2 § 82(02:19:03)
③	Sorqan_šira	巻 2 § 82(02:19:06)
④	Sorqan_šira	巻 2 § 83(02:20:03)
⑤	Sorqan_šira	巻 2 § 83(02:20:09)
⑥	Sorqan_šira-yin	巻 2 § 84(02:21:09)
⑦	Sorqan_šira	巻 2 § 84(02:22:02)
⑧	Sorqan_šira-yin	巻 2 § 84(02:22:03)
⑨	Sorqan_šira	巻 2 § 85(02:23:01)
⑩	Sorqan_šira-yin	巻 2 § 86(02:24:06)
⑪	Sorqan_šira	巻 2 § 86(02:24:09)
⑫	Sorqan_šira	巻 2 § 87(02:25:05)
⑬	Sorqan_šira-yin	巻 4 § 146(04:46:01)
⑭	Sorqan_šira	巻 4 § 146(04:47:02)
⑮	Sorqan_šira-yi	巻 4 § 146(04:47:04)
⑯	Sorqan_šira	巻 4 § 146(04:47:08)
⑰	Sorqan_šira-yin	巻 8 § 198(08:01:08)
⑱	Sorqan_šira	巻 8 § 202(08:25:06)
⑲	Sorqan_šira	巻 9 § 219(09:23:04)
⑳	Sorqan_šira	巻 9 § 219(09:24:01)
㉑	Sorqan_šira	巻 9 § 219(09:25:07)
㉒	Sorqan_šira	巻 9 § 219(09:26:01)
㉓	Sorqan_šira-da	巻 9 § 219(09:23:01)

まず、⑩～⑫は § 86 と § 87 に出現しており、前節の 3. 1. での考察の延長となる。§ 86 では、捕縛したテムジンに逃げられたタイチウド族が、テムジンを匿ったのではないかとソルカン・シラ宅にやってきたという内容が叙述されている。続く § 87 においては、タイチウド族の追及を逃れたソルカン・シラが保身のために、チンギスを秘かに家路に向かわせたことが叙述されている。

§ 87 は次のようになっている。全文を引用しておく。

§ 87：搜索人たちが立ち去った後、ソルカン・シラの言うのに、「私を灰の如く吹き払わんとした。今度は、自分の母、自分の弟たちを尋ね行け」と言って、口白の、子供を産まない葦毛の牝馬にテムジンをのせて、仔羊の肉を煮込んで、飲料を入れた小さな皮袋、大きな皮袋を与え、鞍を与えないで、火打ち鉄を与えず、弓を与え、二本の矢を与えた。これだけ整えて行かせた²²⁾。

次に、⑰が出現している § 198 を見よう。§ 198 をよく見ると、当該箇所は、ソルカン・シ

ラその人ではなくて、ソルカン・シラの子チンバイを長としてメルキト族を攻めた内容となっている。ここでも、ソルカン・シラではなく、ソルカン・シラの子がチンギスに対メルキト戦に抜擢されている点で、3. 1. の考察と呼応している。

次に、㉔が出現している § 202 を見る。この節ではチンギスが 95 人の千戸長を任命しており、ソルカン・シラの名は 95 人中 27 人目に触れられている。ここでは大多数のうちのひとりという位置づけで、特別扱いされているわけではないことが観察される。

最後に、㉕～㉗が出現している § 219 を検討したい。この節は、チンギスがソルカン・シラがチンギスがかつて助けた出来事に触れ、どのような恩賞を望むかをソルカン・シラ本人に尋ねている節である。ソルカン・シラはメルキト族の領地を希望し、チンギスに受け入れられる。ここでソルカン・シラがメルキト族の領地を希望するのは、㉕が出現している § 198 においてソルカン・シラの子チンバイがタイカル砦に立てこもったメルキト族を攻めたことと関係するものと推測される。すなわち、ソルカン・シラが領地を希望するのは、自分の功績に対する恩賞ではなく、息子の功績に負っていることになる。ここでもソルカン・シラの功績が減じていることが観察される。

興味深いのは、ソルカン・シラが千戸長に任命されたという叙述を含む § 219 の次節 § 220 において、チンギスがナヤアに万戸長に任命していることである。ナヤア＝「語り手」であるから、ナヤア＝「語り手」は秘かにソルカン・シラと比べられているだけでなく、§ 202 で千戸長に任命されたソルカン・シラよりも上位にあることが示されている。

以上、3. 1. や 3. 2. で言及しなかったソルカン・シラの名前が出現するすべての箇所を検討した。上述したことはすべて 3. 1. や 3. 2. の考察と呼応していることを強調しておきたい。

ところで、3. 2. では、ソルカン・シラと対比されているのは、直接的には「語り手」ではなく、ジェベである。これを見ると、最終的に、「語り手」は自分自身をジェベよりも優位に立たせる論理を隠喩として埋め込んでいるものの、「語り手」はソルカン・シラよりもジェベに対して好意的であったということが理解される。ジェベは、§ 209 でも見られるように、チンギスの四狗のひとりである。次節においては、ジェベという名前が出現する箇所を考察することにしたい。

4. ジェベ―秘史におけるジェベについての他の叙述の検討―

栗林に基づくと、ジェベの名前は秘史において計 30 回出現する²³⁾。その内訳は、Jebe が計 24 回、Jebe-yi が 5 回、Jebe-yin が 1 回である²⁴⁾。

表 2 の㉑～㉕については 3. 2. で考察したので、それ以外について検討することにしたい。

4. 1. 対ナイマン戦で活躍するジェベ―㉖～㉘の考察―

㉖は § 153 に現れる。この節では、アルタン、クチャル、ダリダイの 3 人が対タタル戦において不当に得た戦利品を、チンギスがジェベとフビライに没収させたという内容が叙述されている。この節で、ジェベはフビライと並列して叙述されている。しかし、この叙述に何らかの意図があるのか、あるとすればどのような意味なのかは、この部分だけでは判断できない。

表2：秘史におけるジェベの出現箇所

番号	表現形式	箇所（巻・§と四部叢刊本の巻：丁：行）
①	Jebe	巻4 §146 (04:47:02)
②	Jebe	巻4 §147 (04:49:06)
③	Jebe	巻4 §147 (04:50:08)
④	Jebe	巻4 §147 (04:50:09)
⑤	Jebe	巻4 §147 (04:50:10)
⑥	Jebe	巻5 §153 (05:18:07)
⑦	Jebe	巻7 §193 (07:22:07)
⑧	Jebe	巻7 §195 (07:34:05)
⑨	Jebe-yi	巻8 §202 (08:24:06)
⑩	Jebe	巻8 §202 (08:25:09)
⑪	Jebe	巻9 §209 (09:01:04)
⑫	Jebe	巻9 §209 (09:01:08)
⑬	Jebe	巻9 §221 (09:29:06)
⑭	Jebe	巻10 §237 (10:11:09)
⑮	Jebe	巻10 §247 (11:01:04)
⑯	Jebe	巻10 §247 (11:01:07)
⑰	Jebe	巻10 §247 (11:02:01)
⑱	Jebe	巻10 §247 (11:02:06)
⑲	Jebe-yi	巻11 §247 (11:02:09)
⑳	Jebe	巻11 §248 (11:04:01)
㉑	Jebe-yi	巻11 §251 (11:12:02)
㉒	Jebe	巻11 §252 (11:14:07)
㉓	Jebe-yi	巻11 §257 (11:37:02)
㉔	Jebe-yin	巻11 §257 (11:37:03)
㉕	Jebe	巻11 §257 (11:37:06)
㉖	Jebe	巻11 §257 (11:38:08)
㉗	Jebe	巻11 §257 (11:39:10)
㉘	Jebe	巻11 §257 (11:39:10)
㉙	Jebe	巻11 §257 (11:40:02)
㉚	Jebe-yi	巻12 §272 (12:20:09)

⑦は §193 に現れる。この §193 については以前に詳細に検討したことがある²⁵⁾。重要なので、考察結果だけを要約すると、次のようになる。この節は対ナイマン戦について叙述されている箇所である。「語り手」の存在が暗示されている“我々の斥候”という表現が4度出現する箇所であると同時に、「語り手」と深くかかわりのあったと思われる“サアリ草原”がこの対ナイマン戦の舞台となっている。ただし、「語り手」も含まれていたと考えられる“我々の斥候”は実は敵である“ナイマン族の斥候”と同一人物である。すなわち、ここには「語り手」の巧みな言語トリックが認められる。対ナイマン戦で「語り手」は見かけ上戦っているように見えるが、闘いは何も起こっていない。

本論との関連で注目したいのは、この節の冒頭に“鼠の年、夏の初めの十六日”(qulqana jil

jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an üdür) という表現が見えることである²⁶⁾。この表現は、§ 81 の gelbüre kö'ün = 「語り手」という本論で提起している仮説を傍証してくれるように思われる。なぜなら、§ 81 においても、「鼠の年」というような十二支による年の表示はないものの、“夏の初めの月の十六日”(jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an-a) という季節と月日が表示されているからである²⁷⁾。しかも、秘史において、このような“夏の初めの月の十六日”という表現はこの2つの節以外では見られない。さらに、この2つの節で叙述されている状況が非常に酷似していることも指摘しておきたい。

すなわち、§ 193 においては、「語り手」はナイマン族と戦っているふりをしながら、実はナイマン族の斥候と同一人物であった。§ 81 においても、タイチウド族の中にいた「語り手」は最終的にチンギス陣営に降る人物であることからみると、実際には敵ではなかったということになる。とくに、§ 193 でナイマン族に馬を取られてしまう失態を犯した「語り手」と、§ 81 でチンギスを逃がしてしまう失態を犯した「語り手」の姿は重なり合ってくるのである。“夏の初めの月の十六日”という季節と月日はそれゆえ決して付加物ではなく、かなり意図的に埋め込まれたものだといえる。

以上の指摘が重要なのは、この特殊表現が § 81 の gelbüre kö'ün を「語り手」と同一視する妥当性を傍証していると考えためである。

ジェベという名前に焦点を当てると、この⑦は、⑥の場合と同様に、ジェベはフビライと共に叙述されていることが観察される。§ 193 の冒頭は非常に興味深いので、以下に引用しておく。ただし、引用は節の初めから引いてあるが、全文ではない。

§ 193 : 鼠の年、夏の初めの月の十六日、赤い丸い日に、麤に酒をふりかけて祀って出陣する時、ケルレン河を遡ってジェベ、フビライ2人を先鋒軍として進みサアリ草原に着くと、ハンガル山の頂にナイマン族の斥候がそこにいた²⁸⁾。

ここで興味深いのは、対ナイマン戦において先鋒隊として出発したジェベ、フビライ2人が出会っているのが“ナイマン族の斥候”だと叙述されていることである。この“ナイマン族の斥候”は「語り手」と同一人物であるから、ジェベやフビライは「語り手」と懇意な関係にあったことがうかがわれる。ということは、⑦の場合も、⑥の場合と同様に、ジェベとフビライが併記されているので、この2人に好意的な内容となっていることが推測される。もう一度、⑥の場面を見ると、ここでは、アルタン、クチャル、ダリダイの財物をチンギスの命令で没収している叙述となっている。このことから、「語り手」はアルタン、クチャル、ダリダイに対しては好意的ではないことが暗示されている。

次に⑧を検討したい。⑧は § 195 に現れているが、ここでも⑥や⑦と同様に、ジェベはフビライと併記されている。§ 195 はジャムカがチンギス陣営の勇者たちについてナイマン族のタヤン・カンにその勇猛さを伝えることを主な内容としているが、ジェベの名前は、四頭の狗と呼ばれている勇者を“ジェベとフビライの二人、ジェルメとスペテイの二人”という表現の中で現れる。ここでは4人の勇者がなぜか二組に分けられて言及されている。

この理由として考えられるのは、ジェルメとスペテイがウリヤンハイ族出身者だということ

で一緒にされた可能性である。この発言をしているジャムカは、既に考察したように²⁹⁾、「語り手」が忠誠を誓っていた人物であり、彼はジャジラウト出自であるが、母方の祖先はウリヤンハイだからである。ジャムカだけでなく、「語り手」であるナヤアもまたウリヤンハイと関係がある。バアリン族の母方の祖先もまたウリヤンハイだからである (§41)。

以上、⑥、⑦、⑧の3つの事例で共通しているのは、すべて対ナイマン戦に関する叙述の中で現れていることである。それゆえ、⑦の考察をもとに考えると、これらの部分にはすべて「語り手」が関わっているということになる。そしてこの対ナイマン戦で活躍しているジェベに対して、「語り手」はかなり好意的であるといえる。ただし、すでに考察したように、実は対ナイマン戦は非明示的には言語トリックであって、戦闘は起こっていない³⁰⁾。

4. 2. §202 と §209 における他の事例とは異なるジェベの位置づけ—⑨~⑫の考察—

次に、⑨と⑩の2つの事例を見る。両者とも §202 に現れる。この2つの事例は次の⑪と⑫ (§209) と合わせて、他の事例とは異なる様相を帯びている。まず、⑨と⑩の登場する §202 は、チンギスガ 95 人の千戸長を任命する内容となっており、その名前が逐次挙げられている。ジェベの名前は 47 人目に言及されている。

ここで問題は、⑥~⑧でジェベの名前が挙げられる場合、ジェベ、フビライの順番で言及されていたが、この §202 ではフビライの名前はジェベよりも早く叙述されていることである。千戸長は地位的に同等であるので、言及される順番には意味はないという見方もできる。しかし、同等ではあっても、言及される順番には意味があるものとも見える。後者の視点で見ると、ジェベ (47 番目) の方が明らかにフビライ (8 番目) よりも順位が低いことになる。それなのに、⑥~⑧では、ジェベのほうがフビライよりも前に名前が挙げられている。

比較のために、四狗の残りの2人であるジェルメとスベテイの順位をみると、それぞれ9番目と51番目である。すなわち、§202における四狗は、フビライ(8番目)、ジェルメ(9番目)、ジェベ(47番目)、スベテイ(51番目)の順となる。興味深いことに、⑪と⑫が出現している §209 では、四狗の名前はこの順番で言及されていることが観察される。このことは、§202 と §209 は、それ以前の §153、§193、§195 とは異なる原理でジェベが捉えられていることを示している。

このことは、ジェベとソルカン・シラとの関係においても言えることで、§202におけるソルカン・シラの千戸長の順位は27番目であり、ジェベの47位よりもはるかに上位に挙がっており、3. 2. の考察とは矛盾するのである。実は、以下で考察する箇所においては、⑥~⑧の事例におけるジェベの位置づけと同一である。それゆえ、§202 と §209 がなぜこのように違う原理でジェベが捉えられているのか、今後検討する必要がある。

4. 3. 千戸長に任命されるジェベ、対ナイマン戦で決定的な戦功を立てるジェベ—⑬と⑭の考察—

次に、⑬を検討したい。⑬は §221 に現れている。この節は短いので全文を引用しておきたい。

§221 また、「ジェベ、スベテイ二人は、自分の得た、自分が取り置いたままに千戸となるように」

と言った³¹⁾。

チンギスによる千戸長の任命は既に前述のように § 202 でおこなわれているにもかかわらず、この節では再度ジェベとスベテイ 2 人についての千戸長の任命が行われている。しかも、⑥～⑧まではジェベとフビライが対で言及されていたにも関わらず、ここではフビライに代わってスベテイがジェベと対になって言及されている。なぜこのような名前の入れ替えが起こっているのかは今後検討する必要がある。少なくともここで指摘できるのは、⑬が現れる § 221 は、ナヤアが万戸長に任命されたという § 220 のすぐ後続する節になっているということである。つまり、ナヤアは「語り手」だと考えられるので、この配置は、「語り手」がジェベよりも優位に立っていることを示そうとした可能性をうかがわせている。

次の⑭は § 237 に現れる。§ 237 は短いので全文を挙げておく。

§ 237 : ジェベはナイマン[族]のクチュルグ・カンを追撃して、サリク崖で追いつき、クチュルグを殲滅して帰還した³²⁾。

§ 193 における対ナイマン戦の叙述が言語トリックとなっていることや、ナイマン族の領袖であるクチュルグ・カンの父タヤン・カンよりも息子のクチュルグ・カンが勇敢であったという秘史における明示的な内容を考慮に入れると、クチュルグの殲滅はナイマン族に実質的なとどめを刺した行為といえる。それゆえ、短いとはいえ、この節はジェベの勇敢さを賛美した内容となっているといえる。

4. 4. 対金国戦で活躍するジェベ—⑮～㉔の考察—

次の⑮～㉔の 8 例はすべてチンギスの対金国戦に関わる叙述の中で現れている。対金国戦が叙述されているのは、§ 247、§ 248、§ 251、§ 252、§ 253 である。すなわち、最初の § 247 と最後の § 253 の間には、§ 249 と § 250 が抜けている。この抜けている 2 つの節の内容を簡単に触れておくと、§ 249 が対西夏戦についての叙述、§ 250 が対金国戦と対西夏戦の勝利についての叙述になっている。すでに論じたように、この 2 つの節は、金と西夏の王たちがチンギスに贈ろうとした女性に随行する人々のなかに「語り手」であるナヤアが含まれていたことを暗示するものであった³³⁾。つまり、「語り手」が直接関与していなくても、この対金国戦の叙述は、「語り手」の濃厚な関与が認められる箇所だと想定できることである。

ジェベに話を戻そう。⑮～⑲の 5 例は § 247、⑳は § 248、㉑は § 251、㉒は § 252 にそれぞれ現れている。つまり、対金国戦に関する節のうち、§ 253 以外の箇所でジェベが登場しており、金国戦のなかでのジェベの活躍が強調されている。具体的にこれらの節の内容を述べると、次のようになる。

§ 247 では、ジェベがモンゴリアと金国を結ぶ重要な関所である居庸関を奪取し、金国の首都である中都を包囲したこと、さらに、Dunčang_balaqasun (東昌城) を奪取したことが述べられている。続く § 248 では、ジェベの名前に触れられるのは冒頭だけで、それも、ジェベが Dunčang_balaqasun (東昌城) を奪取してチンギスに合流したという叙述のなかで現れて

いるので、ジェベに関する内容は、前節の § 247 を繰り返したものになっているにすぎない。この § 247 は、王京丞相が金国の皇帝と対モンゴル策を討議したことを主たる内容としている。

ただし、㉔が登場している § 248 には重要な表現が存在している。それは、「語り手」の存在が暗示されている“我々の軍兵たち”という表現である。それゆえ、対金国戦におけるジェベの活躍は「語り手」の好意による叙述である可能性を秘めている。今後検討すべきことがあるとすれば、§ 247 ではジェベと対になって言及されるのは、フビライでもスベテイでもなく、グイグネグ・バートルという点である。

㉕の出現している § 251 の冒頭では、趙官（南宋）のもとに和議をもとめる Jubqan を頭とするチンギスの多くの使者たちが金国の Aqutai 皇帝に阻まれるという叙述がなされる。この事態を受けて、再びチンギスが潼関という関門をめざし、ジェベを居庸関に向かわせたという内容が続いている。ただ、この節でジェベについて叙述されるのはこの箇所のみで、戦闘においてジェベが活躍したという内容は見られない。この対金国戦で活躍したのは、チンギスが当該節の末尾で Tolui や Čügü_gürigen を賞賛していることから、この 2 人であったと理解してよいだろう。この節では、金国の皇帝がモンゴル軍に惨敗して、中都から南京城に移ったことが叙述されている。この戦いが完全なる金国の滅亡ではないことが関係しているためか、ジェベの活躍はここでは少し抑え気味に叙述されているといえる。

㉖の出現している § 252 では、河西務に下営してから中都のシラ草原に下営したという冒頭の叙述の次に、ジェベが居庸関の関門を破り、関門を守った軍隊を動かしてチンギス軍に合流したと叙述されている。ここでも、ジェベは対金国戦において重要な役割を果たしたという内容が叙述されている。とはいえ、この節は、中都の城内に残った留守番役のカダがチンギス軍の Önggür_bawurci、Arqai_Qasar、Šigi_Qutuqu の 3 人に賄賂の品を送ろうとしたことに対して、前者の 2 人が賄賂を受け取ったのに対して Šigi_Qutuqu だけがそれを拒否したということでチンギスに賞賛されたという内容を主要なものとしている。この点を重視すると、ジェベについての叙述には重きは余り置かれていないといえる。

以上が対金国戦の叙述で現れるジェベの箇所である。いずれにしても、ジェベの活躍は好意的に描かれていると言える。対金国戦の叙述はジェベの登場する § 247 から始まるものであり、その手前の § 246 はコンゴタン族の Teb_tenggeri を抹殺する話となっている点で全く異なる話となっている。この点からも、対金国戦におけるジェベの存在が強調されているといえる。重要なのは、さきに指摘したように、§ 148 に「語り手」の存在が暗示されている“我々の軍兵たち”という表現があるので、ジェベの叙述に「語り手」が深く関与していることは間違いないということである。

4. 5. 対サルタウル戦争で活躍するジェベ—㉗～㉙の考察—

次に、㉗～㉙の 7 例を考察する。これらはすべて § 257 に出現している。§ 257 はチンギスの対サルタウル戦に関わる叙述である。対金国戦におけるジェベの叙述頻度と比べると、ジェベの活躍は対金国においてのほうが目覚ましいといえるかもしれない。なぜなら、対サルタウル戦についての叙述は、ジェベの名前の現れる § 257 から § 264 まで続いているのに、ジェベは § 257 以外の箇所では言及されていないからである。§ 257 の内容は、次のようなものである。

§ 257 では、卯の年に、サルタウル戦に向かう際に、チンギスは妃の中からクラン妃を伴って出征したことが冒頭で叙述されている。そのあとに、ジェベを先鋒隊に遣わしたことが語られている。そのさいに、ジェベの後続にはスベテイ、スベテイの後続には Toqučar という勇者が派遣されたことに言及されている。そして、このジェベを含む 3 人は Jalaldin_soltan と戦い破って、Buqar (ブハラ)、Semisgab (サマルカンド)、Udarar (オトラル) の城塞に彼らを合流させず、Šin_müren (インダス河) まで追撃させ、多くのサルタウル人を殲滅させたことが叙述されている。サルタウルの Jalaldin_soltan と Qan_Melig の二人は命からがら逃げだしたものの、チンギスは Jalayirtai Bala を遣わして追撃させたとある。サルタウル戦に活躍したジェベ、スベテイ、Toqučar の 3 人ではあるが、Toqučar という勇者がチンギスの命令に従わず Qan_Melig の諸城を荒らしたことをチンギスは叱責し、彼を軍の統率者の地位から降ろしたと叙述されている。そして、ジェベとスベテイがチンギスから大いに賞賛されたとある。

このように、§ 257 ではジェベの活躍が大いに語られているが、ジェベ一人だけが活躍しているのではなく、スベテイの活躍も一緒に語られているところが注目される。この意味で、ジェベの活躍の重要度はやや低まっているといえる。また、Jalaldin_soltan と Qan_Melig の二人をジェベではない勇者に追撃させている意味でもジェベの戦士としての意味はやや下がっているように見える。とはいえ、彼らを追撃した Jalayirtai Bala もヒンドウークシュ山脈まで追撃したが結局見失って殲滅できなかったことが、チンギスの対サルタウル戦についての叙述の最後の節である § 264 に叙述されているので、この Jalayirtai Bala をジェベよりも優位に置こうとする意図は「作者」にはなかったものと見なしうる³⁴⁾。

それゆえ、スベテイと対になっているとはいえ、最終的にジェベはチンギスに大いに賞賛されているので、§ 257 のジェベの活躍は好意的に叙述されているといえる。ジェベの戦士としての活躍が弱まっている背景には、以前に考察したように、「語り手」がサルタウル人のヤラワチやマスウドという父子に生き方の模範を得たらしいことと関係しているように思われる³⁵⁾。

いずれにせよ、対サルタウル戦の内容をもつ § 263 には、“我々の長官達”という「語り手」の存在を暗示する表現が見られるので、対サルタウル戦における § 257 のジェベの活躍の内容は「語り手」の意図が反映しているものといえる。そして、この「語り手」がやはりナヤアであることは、ジェベが活躍するこの § 257 の冒頭で、チンギスが妃の中からクラン妃を選んでサルタウル戦に同行させていることからもうかがわれる。なぜなら、以前に考察したように一明示的にも § 197 において叙述されている一、ナヤアはメルキト族のこのクラン妃を戦火をくぐってチンギスのもつに送り届けた人物だからである³⁶⁾。

4. 6. オゴタイ時代において言及されるジェベ—㊸の考察—

ジェベについて言及される最後の事例は㊸である。㊸が現れている § 272 では、金国遠征にジェベを遣わしたという内容においてジェベの名前に触れられているので、前述の考察に連続するものといえる。しかし、この節は、チンギスの次のオゴタイ時代での話であるので、それまでとは異なる視点から検討する必要がある。

以上が、ジェベについての叙述⑥～㊸の考察である。

5. まとめと今後の課題—結論に代えて—

5. 1. 本論のまとめ

以下においては、本論を簡単に要約し、今後の課題を述べて結論に代えることにしたい。

本論は、§ 81 においてチンギスを逃がしてしまう「失態」を犯したタイチウド族の“怖がりの若者” (gelbüre kö'ün) の行為が、チンギス陣営からみると逆に「功績」になることに着目し、この人物が「語り手」か、「語り手」が好意を寄せる人物の可能性が高いことを指摘することから考察を開始した。そして、後者の可能性を残しながらも、この人物を「語り手」本人と仮定しながら進めることにした。

この仮定を受け入れるならば、秘史の明示的な叙述の中でチンギスを救った人物であるソルカン・シラの叙述のされ方が注目されるため、ソルカン・シラについての叙述を検討することにした。すると、興味深いことに、ソルカン・シラに関わる叙述をよく観察すると、ソルカン・シラよりも、ソルカン・シラの息子たちのほうが好意的に叙述されていることが判明した。それだけでなく、この考察の中でジェベという人物の存在が新たに浮上することになった。なぜなら、ソルカン・シラがチンギス陣営に投降する際の叙述において、同じくタイチウド族に従属していたジェベもチンギス陣営に投降しているからである。とくに、投降の仕方の叙述に着目すると、ソルカン・シラは明らかにジェベと対比的に描かれており、しかもジェベほど好意的には描かれていないことが明らかになった。

こうして、ソルカン・シラはジェベという人物と対比されていることが判明したので、引き続き秘史におけるジェベという名前の出現する叙述箇所を考察した。ジェベについての考察において明らかになった事柄として、次のような4点を挙げることができる。

第一に、ジェベは対ナイマン戦で活躍するだけでなく、対ナイマン戦において最も決定的な役割を演じていることが強調されていることである。そして、この対ナイマン戦の叙述は「語り手」の言語トリックになっているので、ジェベの叙述には、「語り手」の関与が認められることである (4. 1. と 4. 3. で論じた箇所)。

第二に、ジェベは対金国戦に活躍したと叙述されていることである。そして、この対金国戦の叙述もまた「語り手」が密接に関係していた叙述であるので、この対金国戦におけるジェベの活躍も「語り手」のジェベに対する好意が反映されているといえる。とはいえ、対金国戦におけるジェベの活躍はやや抑制されて叙述されていることが観察される (4. 4. で論じた箇所)。

第三に、ジェベは対サルタウル戦で活躍した人物として叙述されていることである。このサルタウルのヤラワチ、マスグドが「語り手」の生き方に大きな影響を与えていたことは既に論じたとおりであるので³⁷⁾、対サルタウル戦におけるジェベについての叙述にも「語り手」が深く関与していたことがうかがわれる。ここでは、ジェベに対しては好意的であるものの、おそらくヤラワチやマスグドへの配慮が働いたため、ジェベの戦功はスペテイと対にされることで、その戦功を減ぜられた可能性がある (4. 5. で論じた箇所)。

第四に、表2の⑨～⑫の事例—§ 202 と § 209 に現れる事例—におけるジェベの取り扱いが、他の事例とは異なっていることである (4. 2. で論じた箇所)。

ジェベに関する事柄で明らかになったのは以上であるが、ジェベの考察の中で本論の仮定に

関する妥当性が傍証されたことは重要なことであつたといえる。これは、表 2 の⑦の考察—対ナイマン戦の叙述におけるジェベについての考察のひとつ—において指摘したことであるが、重要なので、繰り返すと次のようになる。

⑦の現れる § 193 においては、“鼠の年、夏の初めの月の十六日” (qulqana jil jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an üdür) という表現が見え、チンギスを取り逃がしてしまう“怖がりの若者”が現れる § 81 においても、“鼠の年”というような十二支による年の表示はないものの、“夏の初めの月の十六日” (jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an-a) という表現が見える。このような特殊な表現はこの 2 つの節以外では秘史で見られない。これ以上に重要なことは、対ナイマン戦の叙述は「語り手」による言語トリックであることがすでに判明しているため、その対ナイマン戦が叙述された § 193 のこの表現と、§ 81 の“怖がりの若者”がチンギスを取り逃がしてしまう場面設定の表現とが一致していることは、本論での仮説“怖がりの若者”＝「語り手」を傍証しているといえるのである³⁸⁾。

5. 2. 今後の課題

5. 1. におけるまとめと関連して、次のようなことを今後の課題として挙げておきたい。

第一に、ジェベの叙述に関することであるが、この人物はしばしば別の勇者と対になって語られている。なぜこのような対となって語られる必要があつたのかを考察する必要がある。たとえば、対ナイマン戦の場合、ジェベはフビライと併記されているが、§ 221 における、チンギスによる千戸長への任命の場合、ジェベはスペテイと併記されていることが観察される。対金国戦の場合、ジェベと対になって語られている勇者はフビライではなくグイグネグ・バートルである。そして、対サルタウル戦の場合、ジェベはスペテイと対になって語られている。

第二に、まとめにも述べたことと重複するが、§ 202 と § 209 におけるジェベの位置づけが他の箇所と異なるので、こうしたことがなぜ生じているのかを明らかにする必要がある。

第三に、1 例しかない事例であるが、オゴタイ時代において言及されるジェベの事例③をどう解釈するかという問題である。

以上に挙げた 3 点は本論文では明らかにできなかった点であり、今後の課題としたい。

注釈

- 1) 藤井真湖『『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図—巻 3 第 110 節～巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察—』『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 7 号を参照（以下の注釈ではこれを藤井前掲論文 b とする）。
- 2) 藤井真湖『『元朝秘史』における「語り手」—“サアリ草原”という地名との関連で—』は、モンゴル国の首都ウランバートルで行われた第 5 回ウランバートル国際シンポジウム『チンギス・ハーンとモンゴル帝国：歴史・文化・遺産』（2012 年 7 月 24 日～7 月 26 日）で発表した論文であり、その論文集は次のようなタイトルで刊行される予定となっている。Номын нэр: Чингис хаан ба Монголын эзэнт гүрэн: түүх, соёл, өв : Хурлын эмхэтгэл 5 дахь удаагийн Улаанбаатарын олон улсын симпозиум 2012.07.24-26. Ерөнхий редактор: Д. Шүрхүү, Иманиши Жүнкю, Б. Хүсэл, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Эрхэлсэн редактор: А. Сосорбурам, М. Болормаа, Хэвлэлийн компани: “Бэмби сан” хэвлэлийн газар, Хэвлэгдэх он сар: 2013 оны 2-р сар.本論文は以下の注釈では藤井刊行予定論文としておく。
- 3) 英雄叙事詩における“作者”の自画自賛的傾向については藤井麻湖『モンゴル英雄叙事詩の構造分析』風響社 2003 年においても展開した論である。

- 4) 藤井刊行予定論文を参照。
- 5) *gelbüre* という語の解釈については諸説あるが、ここでは、漢字の傍訳の〈弱〉及び、小沢重男『元朝秘史全釈』(中) 風間書房 1985 年 112 頁を参考に、“怖がりの若者”と仮訳をつけておいた。
- 6) 藤井真湖『元朝秘史』におけるベクトル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 6 号 2011 年の 45-46 頁を参照 (以下の注釈ではこれを藤井前掲論文 a とする)。
- 7) 原典は Roland Barthes, *Introduction a L'Analyse Structurale des Recits, Selection 1, Editions Seuil, Paris, 1961-71*. 邦訳は花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房, 1979 年, pp.1-54 を参照。ただし、本研究においては、本誌第 7 号と同様に、人名については物語行為レベルを用いている。
- 8) 藤井麻湖『伝承の喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』日本エディタースクール出版部, 2001 年の第 1 部第 3 章の理論編 81-105 頁、特に 89 頁以降を参照されたい。
- 9) abduction はアメリカの論理学者チャールズ・パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839~1914) が科学的論理的思考の方法・様式として提唱した演繹、帰納とは異なるもう一つの推論法のことである。明記はしていないものの、藤井前掲論文 a でも用いている。
- 10) 藤井前掲論文 b を参照。
- 11) テムジンのベクトル殺害についての考察は、藤井前掲論文 a を参照。
- 12) 小沢重男『元朝秘史全釈』(中), 108-114 頁を参照。ただし、下線部筆者。
- 13) 栗林均・碓精扎布(編)の『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』, 東北アジア研究センター叢書第 4 号, 2001 年, 東北大学東北アジア研究センター, 72 頁を参照。
- 14) 小沢重男『元朝秘史全釈』(中), 115-119 頁を参照。ただし、下線部筆者。
- 15) 小沢重男『元朝秘史全釈』(中), 128-132 頁を参照。
- 16) 小沢重男『元朝秘史全釈』(中), 133-139 頁を参照。
- 17) 藤井前掲論文 b, 53-54 頁参照。
- 18) 小沢重男『元朝秘史全釈』(下), 166-169 頁を参照。ただし、下線部筆者。
- 19) 小沢重男『元朝秘史全釈』(下), 172-178 頁を参照。
- 20) 藤井刊行予定論文を参照。
- 21) 栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第 33 号, 東北大学東北アジア研究センター, 2009 年, 429 頁を参照。
- 22) 小沢重男『元朝秘史全釈』(中), 146-150 頁を参照。
- 23) 栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第 33 号, 東北大学東北アジア研究センター, 2009 年, 231-232 頁を参照。
- 24) 本論では j の大文字がないため大文字の場合は J で代用しておくことにしたい。
- 25) 藤井前掲論文 b, 60-62 頁を参照。
- 26) 栗林均・碓精扎布(編)の『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』, 東北アジア研究センター叢書第 4 号, 2001 年, 東北大学東北アジア研究センター, 332 頁を参照。
- 27) 栗林均・碓精扎布(編)『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』, 東北アジア研究センター叢書第 4 号, 2001 年, 東北大学東北アジア研究センター, 70 頁を参照。ここで指摘しているのは、ロラン・バルトの物語行為のレベルにおけることである。
- 28) 小沢重男『元朝秘史全釈続放』(上), 286-296 頁を参照。ただし、下線部筆者。
- 29) 藤井前掲論文 b を参照。
- 30) 藤井前掲論文 b, 60-62 頁参照。
- 31) 小沢重男『元朝秘史全釈続放』(中), 246-247 頁を参照。
- 32) 小沢重男『元朝秘史全釈続放』(下), 80-81 頁を参照。
- 33) 藤井刊行予定論文を参照。
- 34) 藤井前掲論文 b, 46 頁で述べたように、“我々”表現に関する議論の場合には「語り手」、筆者の一連の秘史考察のなかで明らかになってきた、秘史全体の構想に関わる議論の場合には「作者」というように、「語り手」と「作者」という用語の使い分けをここでも踏襲しておく。
- 35) 藤井前掲論文 b, 63-65 頁参照。それゆえ、サルタウル人の領袖である Jalaldin_soltan と Qan_Melig の二人の最後に触れられないのは、ヤラワチヤマスウドに対する配慮ということも考えられる。
- 36) 藤井刊行予定論文を参照。
- 37) 藤井前掲論文 b を参照。
- 38) この推測が妥当なら、タルクタイ・キリルトクによるチンギス捕縛事件についての叙述は、「語り手」自身の経験が直接反映されていることになる。